宗教ツーリズムと現代における地方巡礼

―旭・銚子地区を例として―

安井光洋

はじめに

本稿は前半と後半の二部で構成されている。まず前半では近年、様々な研究成果が発表されている「巡礼とツーリズム」に焦点を当てる。巡礼とは本来、宗教的な儀礼であり信者の信仰心に基づいて行われるものである。しかしながら、近年世界的にその動向に変化が見られる。それが「巡礼のツーリズム化」である。この巡礼のツーリズム化は巡礼者の増加を促す一方で、信仰心の希薄化という問題を孕んでいる。よって前半ではアカデミズムの領域においてこの巡礼とツーリズムをめぐる問題がどのように論じられているかを確認していく。

続いて後半では千葉県の旭・銚子地区において毎年行われている「大師参り」をテーマとして取り扱う。大師参りは現在の旭市で江戸時代に行われ始め、その後、銚子市まで派生した伝統的な行事であるが、近年、人口の減少や参加者の高齢化に伴い、今後の存続が困難になる恐れがある。そのため、ここでは地方における大師信仰

の伝統の一形態を確認するとともに、当該寺院へのアンケート調査の結果に基づきながら、その現状と問題点について論じていく。

以上のように、近年世界的には巡礼の隆盛が見られる一方で、地方の伝統行事としての巡礼は衰退が懸念されている。本稿はそのような現状を踏まえた上で、地方における伝統行事の現代的なあり方について考察することを目的としている。

一　巡礼とツーリズム

「巡礼」という行為は時代や地域を問わず広く行われているものであり、世界の様々な宗教に多様な例が見られる。代表的なものとしてはイスラム教のハッジ（メッカ巡礼）やチベットにおけるラサ、カイラスへの五体投地巡礼などが挙げられる。また、我が国にも伝統的な巡礼として四国遍路がある。

しかしながら、近年この「巡礼」という信仰形態についてその様相が大きく変化していることが論じられるようになってきた。それは「巡礼のツーリズム化」である。つまり、本来信仰の一形態であった巡礼が、商業的なツーリズムと結びつくことで大きな影響を受けているということである。さらに、この巡礼とツーリズムの結びつきにより、巡礼が世界的なブームとなっており、リーダー［二〇〇五］によれば、ヨーロッパのカトリックの巡礼地をはじめとして、インド、アメリカ、サウジアラビアなど世界各国の聖地・巡礼地において巡礼者数の増加が見られるという。[1] また、このような巡礼のツーリズム化については現代の日本においても例外ではなく、先に挙げた四国遍路もまたバスツアーなどをはじめとしたツーリズム化がしばしば話題となっている。他にも巡礼の多様化の例として、アニメや漫画などの舞台を訪れることが「聖地巡礼」と呼ばれ、様々なメディアで取り上

げられたことが記憶に新しい。[2]

このような巡礼とツーリズムの結びつきは「宗教ツーリズム（Religious tourism）」と名付けられ、山中［二〇一二］によれば一九九〇年代ごろから欧米のツーリズム研究において一般化してきたという。[3] その一例としてRinschede［一九九二］では宗教ツーリズムを以下のように定義している。

> Religious tourism is that type of tourism whose participants are motivated either in part or exclusively for religious reasons.[4]

この定義によるならば、たとえ部分的（in part）であったとしても宗教的な理由に動機づけられていれば、それは宗教ツーリズムであるということになる。また、このような宗教とツーリズムの関係性について論じた研究は広義の宗教学の分野に限ったものではなく、仏教学の研究領域においても例が見られ、二〇一七年にトロントで開催されたInternational Association of Buddhist Studies 2017（IABS）では“Buddhist tourism in Asia”というパネルが設けられていた。[5]

ここで、宗教ツーリズムの顕著な例としてスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラ（以下サンティアゴ）への巡礼を挙げたい。サンティアゴはローマ、エルサレムと並ぶカトリック第三の聖地として世界的に知られ、さらに一九九三年にその巡礼路がユネスコの世界文化遺産に認定されたことでより多くの巡礼者を獲得することになった。しかし、現代のサンティアゴ巡礼者は後述するように、必ずしも「敬虔なカトリック信徒」だけではなく、他宗教、無宗教の巡礼者たちさえ見られるという。[6]

これについては日本人も例外ではなくバックパッカー達によるブログやＳＮＳを参照すると、世界一周等の長期旅行の過程でこのサンティアゴ巡礼に参加していることが頻繁に報告されている。そして、彼らの多くはカトリックへの信仰を動機としてこの巡礼に参加しているわけではない。つまり巡礼とその目的地には宗教的意味が多分に含まれているのであるが、それに参加する巡礼者の動機は宗教的意識が希薄なのである。このようなサンティアゴ巡礼の現状については岡本［二〇一二］に具体的な数字が示されている。

巡礼者の属性についての統計を挙げておくと、年齢別割合では、三〇歳未満が約三〇パーセント、三〇～五九歳が約五六パーセント、そして六〇歳以上が約一二パーセントで、男女比は三対二である。国籍については五五パーセントが外国人（一二〇ヶ国以上）で、残りがスペイン人である。外国人の内訳では、例年、フランス人、ドイツ人、イタリア人で半数以上を占めている。また、特に興味深いのが巡礼証明書発行の際に三択で問われる巡礼動機である。その内訳は、ほぼ毎年、①宗教的動機が四〇パーセント、②宗教的かつ文化的動機が五〇パーセント弱、③文化的動機が一〇パーセントで推移しており、「純粋なカトリック信仰」を意味する①が半数を超えることはない。さらに言えば、スポーツとして巡礼をしている人でも、③を選んでしまうと、巡礼証明書が簡素で質感に欠けるものにされてしまうため、そうした人の多くも①や②を選択するのである。(7)

以上のように、サンティアゴ巡礼における巡礼者の動機は「純粋なカトリック信仰」に基づくものが半数を超えないという。さらに①もしくは②と回答している者の中にも、実際は③の「文化的動機」として回答すべき者

が潜在的に含まれていると著者は分析している。

また、このような現象はサンティアゴ巡礼にのみ特有なものではなく、日本の四国遍路の巡礼動機にも近年、類似した傾向が見られる。それについては佐藤［二〇〇四］に詳細なデータが掲載されている。同論文では昭和四四年[8]、昭和六三年、平成八年の三度にわたる四国遍路の巡礼動機に関する調査結果が掲載されており、回答の選択肢を「信仰心にもとづいて」、「信仰心と行楽を兼ねて」、「行楽」、「精神修養のため」、「その他」という五項目に分けて巡礼者の動機を調査している。これらの項目を前記サンティアゴ巡礼の例と比較すると「信仰心にもとづいて」が①宗教的動機、「信仰心と行楽を兼ねて」が②宗教的かつ文化的動機、「行楽」が③文化的動機にそれぞれ相当するといえよう。

実際に調査の内容を見てみると、まず「信仰心にもとづいて」という回答が昭和四四年五二・三％、昭和六三年三三・三％、平成八年三五・四％と推移しており、昭和六三年の調査を境に半数を下回っている。この原因について著者は「講中や檀信徒の高齢化」としている。また、「信仰心と行楽を兼ねて」については昭和四四年二三・四％、昭和六三年二五・三％、平成八年二六・五％と大きな変動は見られない。他方、回答の内容に変化が見られるのは「精神修養のため」である。この項目は昭和四四年五・二％、昭和六三年一八・五％、平成八年一四・七％というように昭和六三年を境に増加している。その原因について著者は戦後の高度経済成長からバブル崩壊という歴史的経緯を踏まえたうえで、「日常生活の繁忙やストレス、雑踏などから逃れ、自然に接しながら自らを顧みるチャンスとして遍路に出る人が、中高年層や若者にみられる」と分析する。[9]

このような動機についてはサンティアゴ巡礼にも類似した例が見られ、岡本［二〇一二］で以下のように述べられている。

現代のサンティアゴ巡礼者たちを見てみると、彼らは必ずしも「敬虔なカトリック信徒」ではない。むしろ、ほとんど教会へ行ったことのないような人々のほうが多数派になりつつあり、さらにはキリスト教の他教派は当然として、他宗教・無宗教の巡礼者たちさえ見られる。「自分自身を見つめ直したい」、「資本主義的な価値観とは異なる考え方に触れたい」、「就職する前に大きな冒険がしてみたい」といった動機から巡礼を始める若者が非常に多くなっているのである。[10]

これによればサンティアゴ巡礼においても前述の四国遍路と同様に、世俗的な価値観からの脱却や精神修養と関連した動機が近年では増加しているという。このことから国を問わず「信仰心→精神修養」という前述のような動機の遷移が、現代における巡礼のひとつの特徴となっているといえよう。

また、浅川［二〇一二］ではこのような四国遍路とサンティアゴ巡礼の類似性が論じられている。同論文による二〇〇一年三月から二〇一一年五月までの調査によれば「海外から来る遍路は、アジア（特に中国）が少なく、欧州・北米が圧倒的に多い。一般的な訪日観光客の動向とはかなり異なる特徴を持つ。」という。そして、その理由については「ひとつの仮説として、キリスト教文化圏におけるサンティアゴの存在など、『巡礼』に対する認知度や親近感が影響するのではないか」と分析している。[11]

このような両者の親和性は当然のことながら、どちらの巡礼も他宗教の信者や無神論者を排除していないことが最大の要因となっている。また、先に指摘したような現代の巡礼における宗教性の希薄化もこれに起因すると思われる。しかし、前述の「信仰心」、「精神修養」、「宗教的動機」、「文化的動機」といった回答の設定方法はや

や巨視的であると筆者は考える。

これについて異なる観点からの調査の例として渋谷［二〇一一］を挙げたい。同論文では著者が二〇〇四年から翌年にかけて行った四国遍路の動機に関する調査結果が挙げられている。それによれば動機は多い順に①供養五七％、②自分探し三五％、③癒し二九％、④信仰一四％、⑤病気平癒一三％、⑥健康増進一三％、⑦他の願掛け一一％、⑧観光九％、⑨修行八％[12]とされている。[13]

上位から順に見ていくと、まずこの調査では「供養」という項目が設定されており、それが半数を超え、かつ最多の回答となっている。これは「四国遍路＝故人の供養」というイメージが日本において一般的なものとして定着していることを示しているといえよう。そして、それに「自分探し」、「癒し」という回答が続いている。この「自分探し」や「癒し」という動機について著者は「平成になって初めて出てきたもの」[14]とするが、これについては先に見た調査の「精神修養」と類似した動機であると考えられる。そして「信仰」は一四％で四番目となっており、やはりこの調査においても、積極的に主たる動機とされているわけではない。

ここで注目すべきは「供養」という選択肢が設けられていることによって、宗教的な動機が最多の回答となっているという点である。アンケートの結果が設問の設定方法や、時間的・地理的要因などの諸条件によって大きく変化するという点については注意する必要があるが、先に筆者が〝巨視的〟とした「信仰」という選択肢は巡礼者たちから巡礼の動機として積極的に選ばれてはいなかった。それに対して「供養」というより具体的な表現を選択肢として設けることで、それが巡礼動機として最多となっているのである。

これを先の佐藤［二〇〇四］の調査と比較すると、まず佐藤［二〇〇四］では「信仰心にもとづいて」という選択肢が設けられており、それが昭和六三年を境に半数を超えないことが指摘されていた。他方、渋谷［二〇一

一」では上述のように「供養」が五七％で最多となっている。これについて両者の回答を検討すると、まず「信仰心にもとづいて」という回答は「自分自身と信仰対象との関係」を意味している。他方、「供養」は「自分と特定の故人との関係」を前提としている。このことから四国遍路の動機については、自分自身の信仰が主たる動機として問われると半数を下回るが、故人の供養という動機を回答として設定すればそれが最多となるということである。

以上のように、世界的に巡礼はツーリズム化し、宗教的要素が希薄化しているという傾向が見られるが、日本における巡礼については「故人の供養のため」という宗教的な意識がいまだに根強いことがわかる。

二　大師参り

大師参りとその起源

仏教における巡礼といえば我が国では、先にも述べた通り四国遍路がもっとも代表的な例として挙げられる。また、日本には四国遍路を模した地方巡礼も数多くの例が存在している。このような四国遍路およびそれに類する地方巡礼に関して取り扱った文献は、学術的な専門書から一般向けの書籍に至るまで広く出版されており汗牛充棟の感があるが、実際にはそれらの文献で取り扱われていない例も見受けられる。その一つが今回挙げる千葉県銚子市で毎年四月に行われている「大師参り」である。

この銚子の大師参りの起源について『銚子市史』によれば「江戸時代に旭町（筆者注：現旭市）野中の長禅寺が中心となって、東下総一帯の寺院に設けたものである。[15]」とある。この長禅寺を中心として行われている大師巡礼は通称「浜大師」と言われ、毎年四月五日から一三日まで九日間をかけて海上、香取、匝瑳、山武の四郡（四

国を模している）を巡拝するというものである。

その起源は天明五年（一七八五）、同寺第四五世融啓和尚が匝瑳市登戸の篤信の檀信徒とともに前述の四郡を巡拝したことによるとされている。さらに明治九年（一八七六）には参加者の増加に伴い、第五七世金山堯範和尚が長禅寺を教会所として定め、「十善遍照講社」として結社したという。そして、明治三八年には正式に宗派へ「新義真言宗智山派密厳教会十善遍照講」として認可申請される。それについては当時の資料が現存しており、当該箇所を抜粋すると以下のように記されている。

密厳教会十善遍照講
御認可願
千葉縣海上宗務支所下
右縣海上郡浦賀村
長禅寺
右長禅寺ヲ以テ千葉縣海上郡新義眞言宗智山派教會所トシ新義眞言宗智山派密厳教會十善遍照講ノ名稱ヲ以テ布教仕度候間御認可被成下度此段規約書相添奉願上候也
右長禅寺住職
明治三十八年三月三日　権大僧都　松戸宥眞

新義眞言宗智山派管長

大僧正　瑜伽教如殿

そして、同年に当時の智山派管長であった瑜伽教如猊下より正式に認可された。[16] 以上の経緯で発展した旭町の浜大師に倣って、銚子においても大師巡礼が行われるようになったと考えられる。

このような利根川下流域における大師巡礼については小嶋［一九九六］で詳細にまとめられているが、そこでは前記旭の浜大師については紹介されているものの、銚子の大師参りについては言及されていない。以上の理由から今回は銚子の大師参りを例として挙げ、現代の地方における大師信仰の伝承形態とその存続について考察を試みたい。

大師参りの概要と特徴

まず本稿を作成するにあたり、大師参りに参加している銚子市内の寺院八ヶ寺に簡単なアンケート調査を行った。そのアンケートの設問は①参加人数、②参加者の構成、③参加人数の推移、④お参りの際に読誦する経典・御詠歌、⑤今後の運営に対する不安の有無の五問である。よって以下ではこのアンケートの結果を適宜提示しつつ論考を進めていく。

大師参りの概要を説明すると、開催時期は浜大師と同じく毎年四月であり、各寺院の僧侶が檀家を引き連れて市内の真言宗寺院を巡拝して回るというものである。巡拝する寺院数は寺院によって多少異なるが概ね二〇ヶ寺を二日間に分けて巡拝している。また、巡拝の際には寺院によっては接待を設けており、その接待を行うメンバーは各寺院の世話人、檀家の中から選ばれている。この接待の内容について、かつては同じ銚子市内であっても地

域によって供される料理が異なっており、農村地域ではその畑で採れたもの、沿岸地域であれば海産物というように、それぞれの土地の特産品を接待として振舞っていた。そのため、参加者にとっては巡礼という目的の他にレクリエーションという意識も含まれていたと考えられる。

次に、この大師参りの特徴的な点を挙げると、まず参加者は前年に葬儀を行った家の家族が中心である。そのため、いわゆる「講」として固定的なメンバーが参加するというものではなく、毎年異なる参加者で巡拝を行う。しかし、案内役として各寺院の世話人も同行するほか、御詠歌講を設けている寺院ではその講員が先頭に立って御詠歌を詠唱するため、そちらについては毎年同じメンバーが参加している。

このような参加者の構成についてアンケートでは以下の七種からあてはまるものすべてを選択するという形式で尋ねた。①自分の寺院の僧侶、②自分の寺院以外の僧侶、③世話人、④御詠歌講、⑤前年に葬儀を行った檀家、⑥⑤以外の檀家、⑦その他。結果としては①七ヶ寺、②二ヶ寺、③六ヶ寺、④二ヶ寺、⑤八ヶ寺、⑥五ヶ寺、⑦二ヶ寺となった。⑦を選択した二例については「住職の兼務寺院の世話人・檀家」および「元御詠歌講の人たち」という回答であった。以上のような基準で参加者が構成されているため、先に見た四国遍路の巡礼動機に比べると大師参りの参加動機は「故人の弔い」という性格がより強いといえる。さらに、具体的な参加人数については、アンケートの回答では一～二〇人という回答が三ヶ寺、二一～四〇人が一ヶ寺、四一～六〇人が二ヶ寺、六一～八〇人が一ヶ寺、八一～一〇〇人が一ヶ寺（ただし住職の兼務寺院の世話人・檀家を含む）という結果であった。

また、お参りの際にはいずれの寺院も基本的には智山勤行式を読誦する。さらに、御詠歌講を設けている寺院ではこれに御詠歌が加わる。そして、その際には勤行式の中から般若心経を割愛する例もある。今回調査した中では四ヶ寺が御詠歌を唱えており、そのうち二ヶ寺が般若心経を割愛し、他方の二ヶ寺が御詠歌、般若心経の両

方を唱えているという回答であった。

さらに大師参りの特徴として、巡礼の形式を取ってはいるが、その移動範囲が銚子市内の寺院に限られているため、巡礼の範囲としては他の巡礼地と比べて狭く、局地的であるという点が挙げられる。これについて筆者個人の私見ではあるが、先導役の僧侶としてこの大師参りに参加する中で、参加者から「銚子にこんなにいろんなお寺があるとは知らなかった」という声をしばしば耳にする。このことから大師参りを通じて教区単位での真言宗寺院の認知度を高めるという付加価値が期待される。

その他に特徴的な点としては、大師参りの「大師」が弘法大師だけを指すのではなく、興教大師も加えた、いわゆる両祖大師であることが挙げられる。そのため、各寺院を参拝する際には弘法大師だけでなく興教大師の御詠歌も詠唱する。これについて前掲の小嶋［一九九六］を参照した限りでは利根川下流域の大師巡礼において興教大師も祀られているという例は見受けられない。しかし、なぜ銚子の大師参りだけが両祖大師を祀るかについては現在のところ不明である。

問題点

以上が大師参りの概要と特徴であるが、冒頭で述べた通りこの行事の今後の運営と存続には様々な困難が予想される。その理由としてまずは参加人数の減少が挙げられる。これについてアンケートで①大幅に減少している、②やや減少している、③大きな変化なし、④やや増加している、⑤大幅に増加しているという選択肢を設けたところ、①三ヶ寺、②三ヶ寺、③二ヶ寺という結果になった。このことから大師参り全体の参加人数は明らかに減少傾向にあることがわかる。

また、今後の運営に対する不安の有無を尋ねる設問では「不安がない」と回答したのは一ヶ寺のみであり、他は「不安がある」と回答した。さらに、その不安要素の具体的な内容について①僧侶の高齢化、②世話人、御詠歌講の高齢化、③世話人、御詠歌講の後継者不足、④参加者の減少、⑤檀家の減少、⑥檀家の信仰心の低下、⑦経済的な問題、⑧その他という選択肢を設けて尋ねた（複数回答可）。そして結果は②四ヶ寺、③四ヶ寺、④五ヶ寺、⑤四ヶ寺、⑥三ヶ寺、⑦二ヶ寺となった。

これらの問題に対して、冒頭で挙げたような宗教ツーリズムの研究から新な道筋へのヒントを模索するべきか、あるいはあくまで伝統遵守に徹するべきか、具体的な方策について現時点では全く定かではない。しかし、そのような現代的な宗教ツーリズムと伝統宗教の関係についてリーダー［二〇〇五］では以下のように分析されている。

もちろん、巡礼は常に、日常の社会的束縛やつながりによる制限から逃れるためだけではなく、自己表現と宗教的探求に対しても、高度に個人化された視野を提供してきたのだが、近代以前においては、それが宗教伝統の枠組みのなかに位置づけられることが普通だったのである。現代において新しいのは、伝統的巡礼路を利用している時でも、巡礼者達は自分がその伝統とは無縁であると述べ、自分の旅を個人化された探求と自己成長の枠組みという文脈のみに位置づけることがまったく当然だと考えていることである。増加していくサンチアゴや四国の巡礼者達は、自分達の旅をニューエイジ思想の観点から理解し、長い間巡礼に結びついてきた宗教伝統に関わりあう必要をまったく感じないまま巡礼に参加できている。（中略）こうした状況を前にすると、巡礼が、個人化された精神的探求という観念の成長を象徴している一方で、組織的宗教に対しては、二一世紀における新しい課題をつきつけているとわかるのである。[17]

ここではかつての巡礼が伝統的かつ組織的な宗教の枠組みの中で行われていたのに対し、現代ではより個人化した目的において行われており、巡礼者本人達もそのような伝統とは無縁であることを自覚していると述べられている。これについてはヨーロッパにおいても同様であり、前掲岡本［二〇一二］では「西欧で言えば、教会を中心とする宗教生活は衰退したかもしれないが、教会の外部において実に多様な宗教性が開花しつつある。個々人が自らの意思や嗜好に合わせて宗教性を選び取り、組み合わせるような状況が展開している。宗教は社会の中での居場所をなくしたわけではなく、その場所を変えつつあると理解できるのである。」[18]と述べられている。

これら両者の考察は先に見た四国遍路の動機に関する調査の「精神修養」や「自分探し」、「癒し」といった回答が近年、増加傾向にあるという結果とも合致するものである。しかしながらリーダー［二〇〇五］の「伝統とは無縁である」、「宗教伝統に関わりあう必要をまったく感じない」という主張には疑問が残る。なぜなら巡礼者の意識がその巡礼地における伝統と完全に無縁であるならば、その巡礼地を選択して参加する理由が説明できないからである。巡礼者たちが伝統的な巡礼に自ら参加している以上、たとえその宗教に対する信仰を持たなくても、その伝統に何らかの価値を見出していることは間違いないだろう。

これについて木村［二〇一二］による論考を見てみよう。同論文は長崎のキリスト教聖地とツーリズムをめぐる問題について論じたものである。そして、近年この長崎のキリスト教聖地が人気を博している「最も重要な根拠」について、世界遺産に認定されたことと、バチカンによって公式巡礼地として認定されたことによる「聖地の制度的な権威と格式である」とする。[19] つまり伝統教団によって聖地として認定されることでその真正性が担保され、それにより巡礼者が増加しているということである。さらに木村［二〇一二］は以下のようにも述べている。

ここで注目すべきは、必ずしもキリスト教信徒の巡礼者に限定することなく、ツーリストをも巡礼者として積極的に受け入れようとするカトリックのスタンスである。これによって「巡礼」は「心の旅」と呼びかえられ、キリスト教信徒か否かに関わりなく、聖地に対する何らかの関心をもって訪れるツーリストの旅をも包摂するものとして提示されることになった。そして、聖地自体も多くの人々に巡礼の機会を提供しうる「すばらしい場」と、広義に捉えられているのである。[20]

つまりカトリックの側が巡礼者をキリスト教徒に限定しないことで、信仰に関係なくあらゆる巡礼者を受け入れつつ、求められる真正性を提供することに成功しているということである。以上を踏まえると、現代の巡礼者と彼らの巡礼への動機は必ずしも巡礼地における伝統と無関係であるとは言い切れないように思われる。

よって、このことから大師参りのような伝統宗教主導の地方巡礼において求められていることは、何よりもまず伝統行事としての巡礼の形式を保持することで、巡礼への意欲を持つ者たちへ「場」を提供することにあると考えられる。そして、その上でさらに「精神修養」や「自分探し」、「癒し」といった個人的な付加価値を選び取れるシステムを構築する必要があるということになるだろう。

結語

以上のように今後の運営に関して多くの問題を孕んでいる大師参りであるが、前述のように地域の真言宗寺院に対する認知度を高めるという社会教化的側面があり、延いては檀信徒の宗派への帰属意識を高めることが期待

できる。そしてなにより参加者が僧侶や御詠歌講と共に経典を読誦し、御詠歌を詠唱することで、より主体的かつ積極的に故人の弔いに参加することができ、従前の供養では得られなかった新たな体験をすることができると考えられる。

また、同様の問題に直面している伝統行事がこの他にも国内に数多く存在していると推測される。そのため、この研究領域においてはさらに多くの事例を集めつつ、より具体的な方策を検討していくことが求められるが、それについては今後の課題としたい。

（本稿執筆にあたり長禅寺ご住職伊藤堯貫師には大師参りに関する多くの貴重な資料をご提供いただいた。また、下総海銚教区の諸寺院の皆様には貴重なお時間を頂戴してアンケートにご協力いただいた。ここに記して心より感謝を申し上げる。）

参考文献

浅川泰宏　岡本亮輔
［二〇一二］：「四国遍路のグローバル化に関する一考察」『宗教研究』85巻第4輯　pp.506-507
［二〇一一］：「巡礼ツーリズム―サンティアゴ・バス巡礼団の事例―」『宗教研究』84巻第4輯　pp.1002-1003

今井信治
［二〇一二］：「第7章　ファンが日常を「聖化」する―絵馬に懸けられた願い―」『宗教とツーリズム―聖なるものの変容と持続―』pp.170-189
［二〇一二］：「第5章　信仰なき巡礼者―サンティアゴ・デ・コンポステーラへの道―」『宗教とツーリズム―聖なるものの変容と持続―』pp.126-148

木村勝彦
［二〇一二］：「第11章　宗教ツーリズムにおける真正性と倫理の問題　―長崎のキリスト教聖地をめぐって―」『宗教とツーリズム―聖なるものの変容と持続―』pp.254-276

小嶋博巳
［一九九六］：「利根川下流域の新四国巡礼―いわゆる地方巡礼の理解に向けて―」『講座日本の巡礼　第3巻　巡礼の構造と地方巡礼』pp.274-311

佐藤久光
［二〇〇四］：『遍路と巡礼の社会学』　人文書院

渋谷宗叔
［二〇一一］：「四国遍路の目的意識　―澄禅『四国遍路日記』と現在との比較―」『宗教研究』84巻第4輯　pp.450-451

銚子市史編纂委員会
［一九五六］：『銚子市史』

山中弘
［二〇一二］：「序章「宗教とツーリズム」研究に向けて」『宗教とツーリズム―聖なるものの変容と持続―』pp.3-30

リーダー・イアン
［二〇〇五］：「現代世界における巡礼の興隆　―その意味するもの」『現代宗教２００５』pp.279-305

Rinschede, Gisbert
［一九九二］："Forms of Religious Tourism" *Annals of Tourism Research*, 19 (1) pp.51-67

註

（1）リーダー［二〇〇五］pp.279-285
（2）今井［二〇一二］
（3）山中［二〇一二］p.5
（4）Rinschede［一九九二］p.52
（5）IABS2017のホームページにアブストラクトが掲載されている。http://www.iabs2017.uoft.ca/programme-list-panels/
（6）岡本［二〇一二］pp.126-127
（7）前掲書 p.133
（8）この年のデータのみ前田卓『巡礼の社会学』に掲載のものを使用している。
（9）佐藤［二〇〇四］pp.222-223
（10）岡本［二〇一二］pp.126-127
（11）浅川［二〇一二］p.507
（12）複数回答なので一〇〇％を超える。
（13）渋谷［二〇一一］p.450
（14）前掲書
（15）『銚子市史』p.1075
（16）以上、長禅寺に関する情報は同寺現住職である伊藤堯貫師よりご提供いただいた資料による。

（17）リーダー［二〇〇五］pp.301-302
（18）岡本［二〇一一］p.147
（19）木村［二〇一一］p.267
（20）前掲書 pp.268-270

〈キーワード〉
宗教ツーリズム　遍路　巡礼